◎グランプリ賞　作品名『山の梺（ふもと）』

作者／小林陽介さん（岐阜県加茂郡七宗町）

どっしりと腰を据えて座った老人には、山のような存在感があります。足もとの子猫もいい寝ぐらを見つけたようです。

温もりあふれる「木彫」作品たち

第13回公募展「木彫フォークアート・おおや」グランプリ決定！

日本文化の原点とも言える「木」を見直そうと、平成6年に始まった木彫フォークアートおおや。今年で第13回目となる今回は、全国各地から138点の個性あふれる木彫作品が寄せられました。

9月22日には、同公募展の審査会がおおやホールで行われ、4名の審査員が入賞作品5点と入選作品40点を選出。また、実行委員会が選ぶ「実行委員会特別賞」と10月3日までに会場を訪れた人が投票で選ぶ「大衆賞」も決定しました。

入賞した木の温もりあふれる木彫作品を紹介します。

審査評（抜粋）

審査委員長　木村重信
（兵庫県立美術館名誉館長）

今回は138人から応募があった。例年のように北は北海道から南は沖縄に及ぶが、初めて外国から応募があった。

フォークアートを訳すと民俗芸術となるが、その最大の特色は、創作や鑑賞が人々の生活と深く結びついている点にある。それは「芸術のための芸術」ではなく、「生活のための芸術」である。その意味で、木彫フォークアートは、作品がそれ自体で完結せず、鑑賞者のイメージを刺激して、さまざまな感情を移入させる。

グランプリは『山の梺（ふもと）』が得た。どっしりと腰をすえて座る裸の老人が、顔を仰向けて大笑するが、山のような存在感があり、現在の閉塞ムードを吹き飛ばすかのようである。ひとえに、荒く強い鑿（のみ）によってデフォルメされた人体に、豊かな生命が盛られたからである。

養父市ふるさと賞の『食べ盛り』は、腹をすかせた豚たちが餌に群がる様子をユーモラスに表現して成功した。山田洋次記念賞の『SpiralView―尺取虫の眺望―』は、あとふた口ほどで心だけが残るという、丸かじりのリンゴを尺取虫の目で大きく螺旋（らせん）形に表し、身と皮を白と黒で対比した。

優秀賞は2点。水の中からヌッと現れたカバの頭部と水中の胴体を、水と一体化して巧みに造形し、まさに『山のごとし』である。『憩いの一時』は、盆に干し魚、徳利（とっくり）、盃、箸などが載る日常的な食膳に、唐突にクレーの華やかな画集が登場して超現実的なイメージを現出する。

いわゆる美的範ちゅうに優美と崇高美がある。しかし、入賞作品をはじめ、本展に並ぶ多くの木彫作品はユーモア美に属する。なぜなら、庶民の喜怒哀楽を表し、ときには郷愁をはらんで、現実的な感情と結びついているからである。

■山田洋次記念賞
『SpiralView ―尺取虫の眺望―』

作者／中井保博さん（宮崎県日向市）

リンゴをまるかじりしていたとき、あと二口ほどで、心だけ残るというとき、偶然、リンゴが螺旋（らせん）の形になっているのに気づいた。素晴らしい形状に感動…。

■養父市ふるさと賞 『食べ盛り』

作者／市川裕之さん（愛知県春日井市）

たくさんのブタがお腹をすかせて、えさにむらがっています。

■優秀賞 『山のごとし』

作者／田代裕基さん（神奈川県相模原市）

水の中から「ヌッ」と現れたその姿は、大きくて山のようでした。そんな姿を水と一体化させて表現しました。

■優秀賞 『憩いの一時』

作者／河田和洋さん（豊岡市）

毎日暑い日が続きます。テレビを見ても嫌なニュースばかり。人間には適度にストレスを解消すべく楽しみがなくてはなりません。

■大衆賞 『ドンちゃん』

作者／橋本美緒さん（愛知県愛知郡長久手町）

ドンちゃんは昭和生まれの犬で、今年で18才です。18年間、たくさんの人を幸せにしてきたその姿は、それだけでとても美しく尊いです。ドンちゃんが長生きしてくれたことに、ありがとうの気持ちをこめて。

■実行委員会特別賞 『陽だまりの中で』

作者／西野愼二さん（奈良県奈良市）

いつかあったはずの、穏やかな母と子の時間原点の生まれた喜び。子どもも大きくなり親から巣立っていく今、その絆を思う。